911.3
ジ
上

為辨抄

十論大綱

蓮二房

今案為辨おい運二ゝ護從の辨ゝて傳書
ゝ屬實の二用とあつゝひ仰抑ゝ義恋の一段
とはゝくはゝゝて仏法の法談事話ゝゝ傳師の
ゝ段とやゝけて尼入ゝの耳ゝゝ初ゝ
それゝ神ゝゝ十論の大意ゝ編説一部と鑑ゝ
世代ゝそれゝの和の節ゝゝゝひ文ゝゝそれゝの風雅と
ゝゝゝゝ詠ゝゝゝゝゝ意ゝゝゝゝゝ仏法と仏法
の論説ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ十論ゝゝゝ對面の詞
の端的ゝゝゝ和漢ゝゝ貴の急綴ゝひ連俳ゝ

風俗の淳朴なるは、しかれに我家の化生なるも
文章訓といひ教誡訓といふ両様の家訓あり
如き世代に風雅あるといひ教ゆるに化して勧懲
といふられ、おのれの和して拘ならざる
ものなるべし。文のまことの論説の
一貫なるは、其後おのおのむきとあつまりて両訓と
文教のつたふると辨とに儒書に化せとなりて
付書れ乎の文章とともに仏教と未来といふ
殺盗婬妄の教誡とにつく早竟い朝四暮三
の其後ふれと家を建つ時のさ地ふれい儒文仏教
此當用とをつ〳〵しは古れい文まつまに廣とかつ
教誡とに実とにくとくと文章ふ〳〵に冠とにく

世上に今日の威儀とそなへ教誡をもて来
世ふに明日の用果をもて儒釈をの差ふ
文章にとられて教誡をこ道一致ふ
文章と教誡の其後をこ家の説さるおちと
はもて俗諺の者れはもつ〳〵今此儒仏論
ふも仏祖通載の全湯篇の浦教篇に文章に
いふ異端辨正を論ふ〳〵我和も
論ひ〳〵ふ勝負とにくもむ〳〵
にて釈迦れ子の言語
の粕ふ〳〵ひて廣家の要とにふ儒に今日
の用とそふ〳〵て服おの要とふ〳〵実にふ
悪ふおや仏を日の用と説て用ふ

虛とはいへど一言も孔子に屬さずして其高遠
大學者なるべんをれば孔子も合点して可及其智
不可及其愚とまたまたいはれし世代の変化
とはいへども言行の如きは有用の実を指かるべきもの
なるべし虛の說やもすれば儒に屬節とはいひ
作家の二ツ便とはいひ俗諺に時宜とはいふ
有用と世用との用を要人君子も建立のこと
道に公利の用あるべし尋常金銀の如き
あれば要者を可用の用にあるべし愚者に有用
の用にあるべし愚者に有用
虛實の要とはいふ有用と世用也

說ちりとはんをもや儒道の如しとはいふかの匹人
とかくやれば天人未來斯文亡ぶとはいふ
むる一言にて孔子に一生の骨ちりを拾ふ例の
教誡と先にて不言道而以文亦論辭也
道を極のなりて文王のごとくなる道
なる虛實の如あるべきを文王とあらそ宗廟と
ひ周公とはいふて社稷といふ
とはいふ至て最期の詞も文王とはいひ特霖の
至も周公とはいふ孔子に何の用ありやとは
のんを迎て一きおやまりやすの所に隱て早
調をあるべし新やせ設い論說の大節すて
儒を決して斯文の失ちるとはいふ

ら深し孔子之施教也先之以詩書而導以孝悌
說之以仁義ニ仁義ニ詩書を儒教の根ぢうて孝悌
仁義い孝悌の先れとしてすべ孔子もたれとやらけて
遠而直之者師也近而愈明者学也とらおらに
文章の師とい内ら好学の明とする論語を文先
教後の用とちうて仁義い孝悌とる先王と先後ねの
説ら孔子と風雅の祖ちんもたもしく文章の用と
ふ文章の用のふ用とうらへ孔子と仁義
非とうらう鬼ともちうもとうつ鳥獸
ともおというてきとと人い蕭牆に言とちうも雎鳩
哀乐の性とちうちうらうきき和漢文章の作ちう信
て文を学ぶ用ちれとも教を学ぶ一理ちうも論語

の詩とい文とちうら家語の作文い大ら話ちうき
その話文ちう虛とちうつけいとの弟子に對して
孔子い古語を変ちうを起てもに仁義くとに仁義の言とちうる
ハ世ハ憶病の說ちう者い時の語脈とかむへ
ちうとと変附の剃と放ちうとき病と言ちう醫
者ちうあって病人とちうる人といむ者い作者
と斷ぬて言ちうのとと世ハ作ちうハ補浮
自在のとと子ハ論語ちう学而篇ちう
時く詩書の文とちうひて吾堂の人とちうと
論ちうれ赤說ちう赤樂ハたれと戰国の
世ちうてれと人ちうと弟ちうとちう

ゝゝこと殷ゝ不幸の三子とかちいくゝ論語のたす
い助語ゝあゝてこれゝ於ゝの文言の優ゝと注とと
はれと風雅の注有歟しいむ返をくもわむ
へゝゝて論語ゝ注を有のせ風雅あゝんゝゝゝい子游
ゝ牛刀の風諭のゝとゝきく子路ゝ麁風の誠諧の
ゝとゝきく牛のおゝとも麁のちゝさも文言の風雅
い余和ゝあゝて論語を注文の教訓ちゝんちるい
貴ゝもゝ子思ゝかゝけ子思ゝゝ孟子の祝ゝものて
孫ゝれゝのおゝとと先ゝ風雅の中も俗諧の学者へ
論語一部と鑑とゝて才一ゝ世代の和節とゝる
一知而和不以礼之亦可行ゝ才二
い文代の温厲とゝゝ即之也温聽其言

厲ゝゝ和節と温厲を訓諫の場ゝて汎諫
い僧秩皆の本懐ゝゝ滑稽の一ゝゝ言語
論侯の外ゝ有とゝゝ今日の言語論侯ゝゝ
一言語い人間の文飾ゝゝ有ゝゝと儒学者の祝と
かゝけて下学上達の論語と失ゝゝい孔子の調
表重表とゝゝゝゝて教誡の実と表ゝゝ文言
の麁と重ゝゝゝゝゝゝ諫やれ門の十哲ゝ
七十二人の学者ゝゝ孔子の虛実とゝゝゝゝ
孔子の権変とゝゝゝ瞻前忽後の譬とゝゝ
ゝい顔回ゝゝゝゝゝ言終日不違
問也屢空ゝゝ虛実の二用とゝゝゝ
違ハゝゝや言語の卿ゝゝゝゝ幾ゝ言とゝ

孔子のきこえいと何ものかまた解空の極名
い仏家の才子ふかん仏と方代の達頂とをして
一代の虚実とをれいたれいこと花とゆとを
おのれ不覚の哀慟して天喪吊くとこと後死者
不興に於斯文といとる斯文のあるをして何す
のあるかんその顔回さく能信而不能知さい虚実
の油ひと氣ひとうれてやそこひ曾子といい子思と
いい孟子もれ子の家と仏へくて教誡の理論ばる
うちれとも文章の虚と仏へさるや對向いおりく
ひとあるとうちて弄の後井夏文のれとれまの
惑る似而非ちち有といいむとして まくめ後者
達ちて虚実のはたもとはさんはらく論語の

興廢とをふに一歩第一虚と仏と一偏一実と
ちをて文教の先後を失つるい怪一北宋の二程
といふ一ものよ初ハ漢魏の比を仏教ばいわ
とて北宋の世ちに仏法ばいはむとして初一禪家の
虚活ちり例一誠諧の調とをいとして儒者の実而
と若ふあるとれ子ハ論語もそをて道理のふ
既とそちてををく虚実とはつまさう漢儒訳
皆非也とてかりハ権変時宜のはとをとて
年仏者二家ノ似是非とも仏氏之言ハ之楊墨
む真道理学者當知漢声義色以遠之とも
好のちり剛ちちを例の文章と後ちて教誡
と先一活ちるちを一勧善懲惡ちを活をしからも

仏書も儒書の是に似て若干儒仏の所説の
相違ちがいあり他を推化といいて推量
といひ此二葉に微笑の意味あれ曾爪一以の
秘伝あり端木子辯舌を用ひ遠の非道もはさう
言偃子学文も阿難の説法ちんぷんかんにて須菩提の
戒行も周子寡の徒に劣り論語も仏書に優劣なく
論語の教も楞厳の誠もたがひ違ひ
て仏氏のこと仏とをとる事あれ共
とあるの詞と相違せずして程子の言地と仏家に
いはゆるとやはりとて二程のんちよりも屋敷の用
とちがひ違ひあるあれ共屋敷の用
彼此不変の一字あれば廉とおあ者いふとんちがひ

我朝の実ちんぷんかんにて儒仏二教の記録
あるこの成僕あり仏者の禅読書儒仏
ちがひ教とに何ぞ論語を失ず
とや異意をもつて屋敷の見ちがひやとて
俗諺の家風ちがひ家を作して酔ふくらの公教
いやしの用ちがひ四民とおとるあい五倫とちんぷん
ちがひ元ら釈迦の真假とちがひ
有に今の儒仏を学ずちがひ入て世代の変化
きかずしちがひて所風雅の注者達られこの屋敷
とちがひる有に今の儒家世界をなげうて屋
無に今日の礼を失ちがひて書物の曠愛を
まちがひて老子の道徒とちがひ教ふ道の所

とくもちて之道の非をまぬかれんと願
の論〳〵ゆゑ〳〵ゆゑ我内の俳諧師い儒うも仰
られさうも釈迦孔子の非とこそして言説の違
と違ひなしとなれい品同八用の喩ててきこえい要
賢典〳〵ゆゑ古風と異下の同とはくらべおく
い助言とゆゑ会ちやもうい老玄のよ歳とまくらを
まねいの儒者も仰者もいけ論を森を姑一て俳諧
に遊の〳〵例と我物の実とをもて刈辰義ら俳のごく
俳諧い鄙羅云之歌の連言のを上ゆゑ屠そるに
会いとし酒いとし酒いあまし利好の恰樹て釈迦
孔子の言俗とたくらる〳〵ゆゑて俳諧ゆゑ言語ゆゑ〳〵
ゆゑ十論を世代の名用とまる〳〵

十論為辨抄　始

序段

渡部和編

茶話禅　仏書を俳諧の録也祖義解て武江
の仰項和尚と茶し投子一碗の茶と話則と
中て俳諧のたくいと悟のるらう言俗に
虚空の実とまれるゆゑ俳諧の同者
と遍照と小町とあるゆゑ出所来歴仏
の心辞あるゆゑ禅家の対問と俳諧の
俳諧の六体の接意とゆゑ今部二巻あり
文　教　世一對へ十論の元例あり文い論語の儒
と教ゆゑ十論と用て祖義の遺訓あれい

一子も論者の作とせし（を）敬い雖ども（の）同疾
に擬（ぎ）よりて然（しか）いの学者（しゃ）なりとも論（ろん）してもしの
誹諧の名近（ちか）くしても俗（ぞく）に諷諫の本懐（ほんかい）と
なりて（て）そ（そ）れ（れ）ひとの（の）ほ（ほ）ま（ま）ん（ん）ともなれる
竹箭と雖（いへど）彼（かの）もむ（む）と（と）色（いろ）にて文教の先後（せんこう）を
こけて儒仰のこ（こ）地（ち）と差（さ）あるこ（こ）い例（れい）に俳諧
の微中（びちう）にて手曲（てきょく）と大綱の辨（べん）にて解（げ）も方的（ほうてき）ありて或（あるい）は人の
文炉冬扇（ふろとうせん）　然（しか）るに王充（おうじゅう）論衡（ろんこう）云作（いはく）興益之能納興補
後（のち）の人（ひと）に説（とく）稱如（しょうじょ）以文進（ぶんしん）炉冬（ろとう）美（びか）扇（せん）亦徒耳（またとじ）
矯人（きょうじん）たる（る）を矯（きょう）正（せい）序（じょ）にて矯（きょう）世（せい）憤（ふん）俗（ぞく）とそ（そ）こ（こ）に教（きょう）
人和（わ）ある（る）ことに（に）ひ（ひ）ま（ま）ひ（ひ）ま（ま）ひ（ひ）ま（ま）と学文（がくぶん）もおろ（ろ）そ（そ）

俳諧（はいかい）と例（れい）の淫（いん）笑（しょう）より五倫（ごりん）の訓諫（くんかん）をひ（ひ）とまれ（れ）
笑（しょう）にて（て）虎（とら）を（を）ひ（ひ）ろ（ろ）ま（ま）ると（と）ま（ま）る（る）一
梓行（しぎょう）所決（しょけつ）　然（しか）るに（に）ひ（ひ）ろ（ろ）ま（ま）ると（と）ま（ま）る（る）十論（じゅうろん）の時宜（じぎ）ありしに（に）ひ（ひ）ろ（ろ）ま（ま）る（る）論（ろん）の
板行（はんぎょう）も祖（そ）義（ぎ）の減（げん）ぬ（ぬ）こと（と）十年（じゅうねん）にして（て）即家（そくか）の時（じ）を
行（ぎょう）ぬ（ぬ）そ（そ）ん（ん）誠（まこと）に（に）釈（しゃく）そ（そ）るの一代（いちだい）孫（まご）も頑（がん）知（ち）桟婦（さんぷ）と
叶（かな）序（じょ）に祖（そ）義（ぎ）の萬（ばん）家（か）と信（しん）とを俳諧（はいかい）の引（ひき）に言（いう）
に（に）ひ（ひ）りて世（せ）はの（の）ひ（ひ）ま（ま）ぬ（ぬ）と（と）ま（ま）る（る）一　負（ふ）亡（ぼう）式（しき）の（の）ひ（ひ）ま（ま）
い（い）オ（オ）一（いち）段（だん）にありは（は）ば（ば）式（しき）の新（しん）に（に）人（ひと）不（ふ）と（と）一

適當（てきとう）　遺稿（いこう）所説（しょせつ）に過（か）當（とう）の三（さん）子（し）い（い）ま（ま）の（の）孫（まご）にて（て）
そ（そ）ま（ま）い（い）天（てん）道（どう）の霸（はく）然（ぜん）不動（ふどう）とい（い）ふ（ふ）て（て）大道（だいどう）廢（はい）有（ゆう）
仁義（じんぎ）とい（い）ふ（ふ）なれ（れ）と大道（だいどう）動（うご）とそ（そ）ひ（ひ）と（と）の（の）有（ゆう）あ（あ）て
れ（れ）調（ちょう）の厨（くりや）の脇（わき）にて（て）ま（ま）ひ（ひ）ま（ま）ひ（ひ）ま（ま）と（と）和（わ）の異（い）廢（はい）を一時

これいまだ理の両面をもつものなれば儒者は孔子と
なりまれらし言論の実をもつからし喧嘩を作
と失よりもなほくるしかるべしやはれ言語
い急緩のくるしはらして勸と緩調とつい廢と急
調とい かつもつ勸懲の用ありてれの文はい
人をもちもちて善悪のんをたて義の端をいい
老家のはよ格をもつ人をもくくしたに義の衡と
道徒の害とつくりたれるに文章のことばとて
連俗の差ものもちんと和諧言語の訳とて
急詞ももちろの用あれば緩調ももろの用あり
儒佛の五差をもつ事意あれば言語の所用
とあるべしとも十論一部もそるや

第一段

天道贊　史記滑稽伝孔子四六藝之於治一也
礼以節人樂以發和書以道事詩以達意
易以神和春秋以道義　太史公贊曰天道
恢々豈不大哉　談言微中亦可以解紛
秦優旃贊曰善言無言為合大道楚優孟
贊曰常以諫死諷諫云云
談笑諷諫　白馬教誡訓　史記に諷諫の二字
として俳諧の贊とたくさんとしいむしもれを居と
いさめ文とあるめ友達とやりけむに実に於て
面とたくらん人の悪をあらためるあるにせあい石と

見て竹ゝとたゝきてうつごとく聞ふ人ハ遠ざかれバはぢ入
にあらしやましけると雁にあらであらそひて機嫌
とそこなひて凡諫をバ綿の中に針を包む如く
やはらかにいふ人をとがめずして是れと漸く悟らせ
ついて我とやむものにてやうあやまちをさとらしむ
割膝の異見よりも酒宴の中に云ひ一言
ありがたかられるは尊き也これは孔子の五経の
諫にも属辞比事春秋教也といへるを以て
諷諫にして書に知我も以罪我も以て
勧懲の道を意とせしもの也 或は子路とかたる
されば詩之諫書之不講是丘之過也といひ
これを云ふ一諫は連続をいひて諷諫の法

諷諫のたぐひにて談笑あれバ談笑は和歌節の章
あらずや言語も実に小悪の人あれバ儒仰
に信じがたきことをへて大悪の人あれバ今は俳諧
の諷諫ありて悪賢の手にも案がたし此所は
孔夫子ハ五経中にも諷諫とおぼえて世代の一道
と述べましき七十余国をめぐりし人ハ儒も家
もかなりえざることもなかりしの隠者にも笑れあるく
吾非斯人之徒而誰与とうち大きなる嘆き
と子嘆きれしかれども才之頌の我とするなれバ
一對して之を云ふ丘が諫は解てせぬより
滑稽 史記評林崔浩云滑音骨稽音雞流酒器也
轉注吐酒終日不已言出口成章詞不窮竭云々

辨云史記に滑稽の賛にあるあちらにたちたい
座賓の先後にたちたい談笑の風諫に
そそそそそそそそ凡いい世性の和説にあるたいたい
諧語滑利にしてたちまち或らく智計疾出して
或を般捷の変に達するも角てい司馬遷の
微中解紛の旨字にして俳諧を遠く太史公に
勘破されて賛詞を近く東方朔に説破
そそそそそそそそ

俳諧　史記索隠に姚察云滑稽猶俳諧へ辨云
俳諧の二字は漢書にありてかくのごとく分ぬ
ちりと古今集にもはをれも俳諧の二字を
品題とあるそそそそ別に誹諧の一ぢあり

の俳諧とそそ各てのおのおのちりとやけ頃の式用ハ
るに誹るも俳の音あらとやそそひありとも清ハ
にに史記のやや文を反くへきたれるい人の馬
にに為りて伊威の子有にしにしるへりむ爰に言篇
と人篇のおのおのいい十論一部の大口訣とする一
ちて松子庵の遺稿夜話に俳諧の二字を伊威
とて史記の諺林の襲貶ありたの夜話の略文
にちそそ滑稽傳に九段にして三段に司馬遷
本書あり六段を指す孫の附録ありとも角
俳諧の訊諫とたちたちたの
浮あり刘辰翁云滑稽者全テ鄙藝乃直
従上に藝を在詔来此即太史公滑稽世重作

云滑稽而引ク二六藝ヲ語ツ文意又不相屠惣ハ
直誤ハそ此等ん俳諧とさらねのミにあらそ
面く（白く）の皇柱に掛在をし六藝の子孫とも
さるなるや然ハ六藝の用とハふもれ乎を
天下の通称として儒佛も連俳も世にの秘と
をし射御と書数ハそうの藝あれハ或ハ
も事を先とうして其いそのつとさる人あり
或ハ是を先とうして事ハ後とよめ人ハ
あらそ一しを合て万能一藝とハいふもれを是とさる
を聖賢といひて事とさると家業といふ
ゆゑ孔子の軍法と冊有にとし へのちりとし
孔子は多能の取あつかひも小刀細工の微塵も

守てさるに孔子も射御も書数も風雅の
文なきをもて野也として孔門の弟子ならハ先とし
詩挿となりたるものもみとふくハ皆連俳
なりけれハ誠に論語の下学上達ならん
中呂以下に一道とかやくて人の上手に風雅と
分るもとさて畢竟ハ世代の達たるして鄙藝
も下学も今のふ用なきるいふに列筆の
二字士を其のれよ百信の大史に文とりしまて
六藝のみの子にありとあるや其それの子は土を
扨下よりなりて何て例よ俳諧の先言とまて
なりなりてきたるを然ハ会にとりて
白馬大綱に俳諧の對向あるも向日俳諧

言語と云て世代をやゝくり返ふくれ
ゝは科の一とゝ宰我子貢と祖とゝ言語
加て儒仏老の三宗ともに言行の二とゝ
て儒仏老の三宗ともに言行の二とゝ
以て論語ゝ使ひ〳〵い言語ゝ使ひ
いゝて方ゝおこあひて言ひ行ひ人ゝ施て
言ゝ行ゝゝ天地の己間ゝ行ひゝふゝゝ
ゝゝゝゝ何ゝ我貢と祖ゝ政ゝ此
の入用ゝて文学ゝ道の化粧せられ釈迦
のゝ子のゝ三界の人ゝ信ゝれて仏ゝ
ゝゝの人ゝ河難迦葉ゝ言ゝ言ゝ
貢ゝ語ゝ儒書ゝ

言語ゝ儒書ゝ対ゝ仁の字ゝ書ゝて言語ゝ省仁
之文也歌樂ゝ省仁之和也ゝ云ゝ言語の
大切ゝ道ゝ用能の用ゝ使ゝ知ゝ
先ゝ道ゝ道ゝ知ゝ言ゝ言ゝ
言語の似而非ゝ言ゝ人ゝ
ゝ人ゝ人ゝ言語ゝ屋ゝ
七情の変ゝ万物の変ゝ言語ゝ
情ゝ一方の実ゝ言ゝ言語ゝ
あゝ知ゝ一歩ゝ里ゝ言ゝ
再問ゝ子貢の心ゝ論語ゝ行間ゝ
行ゝ子張曾参ゝ皮ゝ
人ゝ俗ゝ行間ゝ

云たれも黄白さうのあるに論語を抱懐
こゝきに張衣あうて礒世人を論じ及ぶ
いやゝ張曾折皆ゝ為めなし
とゝ云うて仙諧に仙と為ふ時を以偏の
ゝいうに訊諫の代なり非に向て云ふ逆の二書
ゝ云ふ所なる伊尹太甲之任者也五就湯五
就桀ニ云ふ所にて塵寒の要を達て時宜
ゝ自在の人なるべし や非に對云たれ〳〵羅穀
の角をこそいうむ彼ちこと射とまうを要と
ちうて智仁勇のことを兼ねたるを射とあるい
を要ゝあるふと言語の用をまうる
儒門のうたうたうへ

あるいはこゝろふ人あり
ゝうとうもれるをいはの對問ゝ言語の
優游自在とうたる人一今こゝ何とうあうて
仙諧の祖とたゝちむゝ新説ゝ世ゝまうる
燒炉仙ゝたうれるをこゝ周をまうこ
のふ事をたゝこゝ塵寒の要をまうをは
の言語ゝあるふとうる遊の子を卿とうて
論語の夫子ゝ云ふ世のゝ隙を
ゝて危行言孫ゝて儒門ゝ富節の秘代
ゝ長徒訊諫とうる宗説の仙諧ゝは
いいをまうて訊諫の言語をうふゝ山海老人
の遺訓ゝまうをうれるを以雅の祖ゝ

禹湯文武　遺稿に文祿年中の作なりと禹湯文武
作りて子下に周公をやく連ねし仰れまい
佛諸の訓誡をもちゆめ子孔子の意入あり
それにあるもの作りて祖述の子削あり父作の
條文あり或をもちてけさるもの抜
ぜんをもれをけいに向いて論の大綱あんに例の
過當をもくらう所やはれしる辭の後部
あるらはのもまた詳めをもて後系のほとをもて
例の遺稿をもくちまて也

詩書の媒　一貫抑れ孟論に儒作の建立を作る
をもて作家禪沈の異端とせをもて虛家の二氏
の自在をもて称をもて論の大略に沢世に急用の

儒沈をもくもて書に推号の作をと信をもて
い滅ねをもの人の說をもて論語の
孔子に備に正をもて權をもてをもて同向異
答の虛實自在をもる長沮桀溺の事懷をと
加て異端といい攻めをもて曾子有子を
加をけてそのもちをもて孟子の程論に作り
朱程の書の作をもてかつも權事のおのあれい
をもれをもて孔子の遺書にあるもて家說をもれ猛の作
言あり史記を司馬遷ら誤あり西方の事人
老子のをもてをもの異端と攻るい王作の事治を
をもをもれくら教言に沈してれをのたりをもい言
も作人をもて世界の人の氣の作をもに論語一部

と称して好ましからざる弟子列揚里夫をして言ことばいね
し好まるの人ありて要とたしなうて孟子と為とい
その虚と広いくしあるくつて言説の理屈よろう
ばうして舞し聲豊と夏せうの八飢饉の年の新
を食し仙一合の麦とうめれし下民の拾を
商ありまやいれの海濱う天下のうして親とし
きのことをあんたれし論語し掌我とせうし
井仁の答えるまるへきをあるやの好まるの人と
うしえて這奴ッ知らう言とせうさるる孟子の
公孫丑しむうして知言の自讃しんもの粽
いヒ子第答ありうし念仏論語の文と説めへた
維戸の達戸のを浮世とかうへて浮世不浄

の外捨ありうしを例の虚として実とれうに
粽巴と異端として世のつまれたと軍法の
謀して敵と陸方とする信点也ありて
の人くしを表むきの実し実とかされて作る
も肩衣とくれされい論語し和節の為用い
いれと和しひいつれと節しいむたれや論語
しし論語ありうしの人を減し俗借い虚
実の虚し作して唐天竺の儒者仏者と思
我名の浮世連歌師とくの法世粽真の花
の花実をそへ醋吸のこ花の一座とやうに
て酒盛の拍子に乗をむとしたれと於実の
和代して嫌の一字いけ一對しする〳〵

猿田彦　神代巻に先駆者還て白す有り一神居天八達之衢に其鼻長七咫背長七尺眼如八咫鏡而赤酸�damu云云按るに天津彦彦火瓊瓊杵尊天鈿女命を宮殿の内に召て猿田彦に問ひ給ふ鈿女命いひけるは我は国神也と云ふ

風雅俳優　齋部宿祢廣成古語拾遺に天照大神赫怒入于天石窟八十万神就石窟前に榊を庭燎に巧作俳優の二子に相與歌舞云云按るに俳優の二字は漢書に俳諧雑戯也

八雲　素盞嗚尊の出雲の国に八重立る雲を見て かきこもる やへがきつくる 八重垣を 妻籠に八重垣つくるその八重垣を 歌祖の帝と祝ひ給ひ 歌道の帝と祝ひ給ふ 三十一字を以て 神代の帝に戯れ奉る 神代の帝に戯れ奉る 神のあさくら人とは 地ちらは 拾ちらは 拾ちらは 集の序に 詞と作る 詞と作る 詞と作る

さてさて 古代の神も俳諧の俠哭 同じ事 人は 大和の風雅と云 齋部 詞と記 文 俳優と神楽の 詞と 俳優と 和哭の才一 ふれ ふれ 子人間の式 知一

八雲　素盞嗚尊の出雲の国に八重立る雲を見て かきこもる やへがきつくる 八重垣を 妻籠に八重垣つくるその八重垣を 歌祖の帝と祝ひ給ひ 歌道の帝と祝ひ給ふ 三十一字を以て 神代の帝に戯れ奉る 神代の帝に戯れ奉る 神のあさくら人とは 地ちらは 拾ちらは 拾ちらは 集の序に 詞と作る 詞と作る 詞と作る

いひ後章よく盧突とよぶ文章の起結を雑運し

法式新旧　梅さうにけ一段た言篇と人篇とは
あつて新旧　新旧の意れとさけて法式の差アるよ侍
ありとた今とく皮裏の陽秋いなや、いむむきあい
今の才論よ世の残燼とをろりて例よ即暇の時
あるい貞享式へと撰をて（へきゐるうやこれうい雑なる
の一大事すにて聴者、無定則道不入とあり
のうけ家語よ伯常か雑難るかみや式の新旧
いへに宗因て（へきや

檀林額　江戸八百韻に寛文こて檀林の木
西り株の花とて宗因の発句より檀林の名い
世よ弘く（しや或もの剿路はしむうし　たれ衆

ぬを作られ或ひ花をぬむて（をらうなり
其の折とかふまれやは（れ貞徳より宗因の
比ゆうを所えたきを見て指をとそうつくりよ
全く連歌にかゝりれい一句くよ誹言の論あり
蕉は宗因を発句も所句も皆しく詞の新子
のこりて意よ学ぶへまそそあるれい様れを稀れ
とも檀林をそれしとももいひても財よ風雅のなをま
流れもまたを十年にてとさらんいたよ俎弄の遺訓
よしく今より五十年の変をやうちて俳諧の上手
もなくもなし去の子細を當時いたんの叙て
達よいひれらうそ手なってなり餅粉をききて言
詔の視命とはゝりむとをて海して文章の変化を

論をくだす小亭淨面のことまくらを相伴のため
誠とつかまつりそうに石振の持論とおもう
とおもえども世の接話してれまた地の所面非
ちりをくい深くまあくこと新しい
唐虞先　此三字は文の字對と辨ずべ一言に
ことのもとあとといいて義農のいろいろ
とをとつかまつる大極世極とも如くもて唐虞
の国とまして齊整に對一つる例の書と所
とも深とやつ　つる文章のことと信ず
爾十編の文此寄絶ちるを面白い例を示
誹謗不知　接をとるに此二句を以傳の要文
文に論者と齊所せるべし二句の差ほど

一はたくく八雲に眞像ちう公任も拾遺抄
のくゆるあるべしおりて信ずべきとおもう
古人とのもきうるもおれら古人連歌の家に
けるべうて言篇の雜諧の篇の人篇の俳諧
人篇の俳諧ゆい史記ち姚察ち仲文ちと
て風雅もは式も皆くくゆるれるべう例に過
當のことはうてたとい知れもちゆる家ち
と詩林に諧謔滑稽とい文義ちて花洛
自在とつりけ紙を洛の双林寺に假名の碑銘
ありてこれ十二字に七字の謎文ゆり謎の解方
い内陣の秘軸ちとー但石碑に謎文のも
と漢家の所はとあらつりとも

傳曰

一字録の儒佛篇にむかふ儒教の
こ道こ道として人間とこちらの天の教にて
とに虚実の二ありて老子の道を守
かつ天地の動静を道とふ
名とし常にして善悪の道あれども
御善懲悪のこころもとして老子自性の
道を道とこころにあり名のこころ
へきに名にしかるを霊然不動のそなへと
なれを人間世の応用にあるとへはと養
性にそなへの人をもちられし世をに老子
は人間の法にしたがふ

字句違ひたれども儒佛とはあのて分れのす
とこころへそを重ねる仏とはこころのの
とはつく角しはこころ事はの表重ねは背と
ともるへをあてはこころや仏はかれ推課
と分れこんむ南宋の孝宗に仏教心
以ての養生以儒治世とも御問をかくこと
達してはのこ用とこをは仏に儒者仏教
とこころにて仏教儒書とこと
してはれる孟子之吹毛と仏人連接
仏諸の虚と諸とこるも仏諸一連の実を
あさむきるも仏諸一貫の道とこるを歓迎
と一如のはとこころこと人間の我執と

一つ[illegible]ひて[illegible]ある[illegible]道とふい儒仏神の[illegible]
てをれ[illegible]の[illegible]を偏[illegible]ふ[illegible]ひ[illegible]
神[illegible]と神[illegible]と感仰應[illegible]
地[illegible]の[illegible]用[illegible]
あれて[illegible]ふりはの[illegible]に[illegible]敬して[illegible]
いつるとて天下の鎮石[illegible]一兩部[illegible]
の[illegible]に[illegible]詩の[illegible]の[illegible]詞[illegible]例の[illegible]
と[illegible]に及[illegible]誠や十編い儒仏の二用
[illegible]遠く老教の[illegible]近く[illegible]
[illegible]と[illegible]
自在の[illegible]地[illegible]
故實　仰[illegible]古[illegible]賢の[illegible]

国家の效とひ故[illegible]
[illegible]の[illegible]解[illegible]の[illegible]
の[illegible]瑠璃[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

伊賀素生　白[illegible]
[illegible]
伊賀の城[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

さるのいろんナカ九の幸に宿とちりそすて清閑
ト香ヲ以テ作ラ武陵ト其南流書ト云人
トトリ深川の吉野蕉庵ト臨道あつ[illegible]いこすた
の幸あり[illegible]けて詩ト俳ヲ[illegible]ヲ書ヘ雅俗の
遺状ト配合あり[illegible]オニ酸の老後のトトスル

天禀一道　むしろ儒仏の大道も教ゆる道
の七仏と称ト[illegible]れ子ヘ現在ト七人の所あり過去
ヘトトトに廬安の企ちん況やれ子の廬と安
ヘトトトに[illegible]ちこいのトトと共宗代然
の他受用ちもて世ト王道の大かちくこちり
ちれ一道の祖トちちく人ト智性いこ所ト同ち
れ[illegible]燈仏の授記ちりこいい霧ト表彰

比ちとつるもと角こ宗くの俗人ちり山有
今の仏諧ちもてちたの先ちり仏ちた
ヘ史記と仏文こして言偏ト人偏とにちて新
仏の式とヒちちる強の一字ト十論ト都仏
雅風私　探ちる[illegible]に仏結語ヘ信の一字ト[illegible]
ちくちり十論ト[illegible]ト[illegible]ト古人とりとて[illegible]
と建むとちへはちちい儒仏の極設ト
好悪ヘ例の五仏くもいちト貞宗の二宗ヘ
古風ちちちる[illegible]の仏文と和言ト新仏の差
ちと信ちて[illegible]ちる信の一字の大騒ちる[illegible]
貞享式の用ちて[illegible]ちこ[illegible]ちも道の人
ちこして雅者の眼ト着へちも

第二段

風雅ノ道理　按ずるに是理とは前よりの巻[illegible]
のむねとする所にして俳諧の家に最肴ぬくべからず
元は法よりなりて天命の理の妙用にて此理なき
道のおこる所とするは此理をもって法のさだまるところなれ
ばとひろむる也法なる故に道の備ふるをかふいはゆる
法の論すべきにはあらず論者の微中と辨をへらさ[illegible]
まするにもその理にふくむ天理の動く所より[illegible]
あり時にもあるとくにも理をとくふして其[illegible]
是といふ所を知る時はあらひあるにも時といふ[illegible]
ある折も是とよみふさぐの喜怒哀楽をあらはれ

とひろに随くよみて新しみての理のもとなる事を
修して人間の理にかなひその上に此にちらて儒佛の
説さる所ありて其ところに名儒名僧は[illegible]て道
の高遠を修ずるも世法に五倫の用なく
俳諧とは世中なるものなる事也

心ノ天遊　荘子道遥遊に希逸が賛詞あり遊者
心ニ有ル天遊一とあり此れは天游とは寂然不動
の志をいれは仁義も理非もなく[illegible]論
の内ある遠く儒佛の老重なるも其流家
のこと地をさしあらて其道の向の字解をたてられ
ざる也それを才二段の要とまする一

先後ノ家　先後於の大略に我家の者ぬ理のさ[illegible]

といふ事をさとし誠に其の好む所へさもく一定のちらひ
あれハ是を万物の評として儒仏を設さるゝ者
とありまた儒ハ実の表とさして仏教をハ虚
の裏とゐるさるなし其虚の裏を実にて
これ実の裏ハまさに虚なりとや虚なるハ又実
とせされハ実ちるゝかなゝ虚となるか是を西
翼の偏なして是ちくり一財の入用も是を言語
ハ財ハ虚実とら実虚とるあきらかさへ言語
の決中まして是れと撃石火とも内電光とり
間ニ不ㇾ容ㇾ髪ともいふ事なれハ学者のもとの心
下すの義を師匠よもろいて弟子ハ千里の一
をきれハ是れを自悟とも自認ともてるも

釈迦孔子を持向さとし言語の重きをかへし
のみゆえ是をもと道達立の大本ましと述へき也
先後の二字ハ我宗の常談として我の好む所
ハ認まよるなし

之條法　白馬原道訓ニ論語の和節を細乃して
之條の法の品あらす言の略文に字一ツ世俗の人
秋とゆて仮借して数子之字として説して老の
尊卑を重くてさしてハ財の言語よありそうかる
例の虚実に自在なれハ是を次まつう
史記の誌笑を家法として言語の用不用ときれ
ハ是を次に是れて風雅を隠者のやうなれ
ハ世にいへ猛ね勇士の家なし茶人のさひと字了

うつくしき馬のくらとやかへりもやまむといへるにおもし
ろしけれしきといはれつるも雅俗のさかひにかゝりて人
の心をうごかすものなれてたり過ぎなく俗家のは
なりあさ田のはの鶴の拙さなりしくきこえれて法を
雅行のなれやはなるとききしくきこえて人もあれこ
それと巧言令色といひて文はとけに力味といひ
武はとけの烏呼(ヲコ)といふ具れなき手家拙にて頼政
の哥の哀(アハレ)と評して武士の遊(アソビ)と給をしかば和哥の
然性をきこえむのことなりきし仁者必有勇といへる
文武の名をわかつといへりといへども行ひの君の
まさるべしはりや風雅は文章の花にして文者
貫道之器なりと世に俳諧をとなへしおのれの我かこと

文章の自慢なりと聲に江戸の娃嫩をさとし
酥をさへかれいとおもへる人和節を風雅の酥娃か
めし酒きりて例のかうしとなるをや宗よ之比の
詩文とういふを論語の和節に例のいふとしかの近人
まなぶれたりしされば子路と共にをし精の
おかしきものをはやめの對向を日本の優游にして
まなばれて夫子の諷諫なつかしんやまたく論語の
俳諧あるとおもへる近く俳諧の論語なりとおもへる一
史記は劉董の二学士なりとよくきこえぬ俳諧をなし
おのれも喰ぬ鼓汁とおもしおのれは似たる人肩にて
その毒をとはくまむ人を俳諧のその地をもとめんとて
なれば誠はいふべからさるは儒仲舒の言と味を取合や

て世は今日の用ニあてる十論一部をしけこに
はゞけてそと建立の門弟とす之し

世情ノ事　操さるゝ事とするして儒仏一樣の氏
あらさるにて釈迦の説あるして仏家の空相と
あるにあらんはあらて又備を宗としてそれハ
なきりし人とも一座とさまて夫日を射の釈迦
をよくあらむまて人の機縁をよくはかりておし
かゝねてまていハかね答もはたて以て儒の文字
も自他の文の一大まりハ記して和の二字あ
きむあるを聖人の眼力より相似の法花経
なるまありて諷諫し諂諛をたかれて辨説
あれハこの場の危き否とあてて世情の事よりあ

俳諧ノ古人
時に詩のいの中より為れとなむつきても
此詞ニ蜀の杜子ヨして仏中ヨは時をえん
い奥羽より行脚の体にあれハ也遺稿夜話ニ於ノて
奥羽より出て蜀の杜子美と此稿ニ出ある
如何の其りきるハ世界よあつかう大道もかるよ
太極の一气より三皇ヨ仕てより又帝ヨ伝へて
の聖人賢人を天子とより其あるにより周ニ孔子
と道の本歌として詩書礼楽の法と為に書
工商の義をとあつちまて出してや師まで運きち
祖とらやかんハ俳とあらむへきハ古世の古人今出家
ならどいの俳諧として人々を史記ヨ俳人
其れともハ世の言ハ誰ら古人ニいとむ法れと

此詞の過當なるは代々の宗匠たちの
いひつたへ侍りしまの人ありて此詞とあやまり
伊勢人なりしに京洛の言語ふんとなりにらく
なる毒の歎息とかたるに孔子もまた京洛の
なりやうをもて詞をもて湖南の武士に
しかるをもてしるべし射の道はつねにあるまの的者
ある其角も例のごとくに俳人の句体のかたんん
も自己の俳諧の晴ふんとこの詞のほかなりて
ゆるをもてしるべし言語の表と裏とあり所詮のおもむき
きこえぬ地あるをもてこれを雖性の遺教とあるべし
我ひとりは新四罪人とありて古今の宗匠と敵と
へくるねのへるを斯文あつらへいさう遺教の報恩

俳諧之詩歌　抽之

あるべし此五子は詩十論の
義なるべし
四行とかたれとも詩と連俳と四章
俳諧あるて俳諧之連歌も連歌之俳諧
なるべきやなり傳作も連俳あるて私
ることなく者禅者といひ孔子の弟子
なれと論語のみあるて其智可及且愚
可及とも過猶如孔子いたすまの用あり
法と頑慳のあつひもむ法輔の和かなる
古今集れとも都をもおもかをもかなる
俳諧の所ちもとも此論ちに杜子をもく

の手語ちがとして俳諧之詩をとらへ
誠に宗祇宗長より兼載紹巴の連歌とも
も耳におわしてにたらへて尼も入る面白
い例の手語うして俳諧ふれい一ちい耳にゆて
二ちい意ちとまれとまとまい思ひ和の面白
ゆなるもの俗ちれとまるとの雅諧
ちゆなるとは柄ともれいひの風言ちゆ
てれんちやうとのちくいちやや耻ちくの
ちゆうして婦ちと人の面ばちるや

○不遠波　助辞辞要序云助字者詞急緩而可
知物之差別ちれとまれい言語ちを音韻のこと
情愛もちる〳〵れい急緩い音のあるひ

ちて雅俗い韻のひくちとちて一合拍ちる
西行の歌に山人と花をもやちきやめれ
いさちちとしてちりはちいちく伝語
ちんにいちちの雅言ちけいてくあるる
山の家とはちうこれちて伝中の雅ちにくはい
て西行上代一ちい育の接和いむちるい一ちも
詞とかちちちるく俗諧所れい富士の雪
風ちふひくしてありの作ちいあちちち杜子美
い態ちて所とは春水幾深ちも野航恰受
とも縵侵堤柳ちも縵捲浪花ちも星低
とひ用涌ちとちるれちの物語い句ちに
あちて語不驚人死不休ちとちきる風雅

精神とゝもに一志ゝく訪ふ所の動詞の意
にて感仰とゝもに却の哀然とする一誠よ
二者を虛實の自在より例のちゝく例のさい
くある時とゝれ一ゝゝとゝ一あるおい如
ひゝゝも為ゝ一ゝれと風雅の優游みて
哀怨も訊諫ゝ云ゝ

名人場　遺稿後詩西りの富士の言ゝ強ゆちの
叫ゝ用ゝと俳諧ゝてみゝれと名人の場ゝゝ風ゝ
ゐいくの有用ゝ連言みてそと上ゝのわゝ
いゝゝゝゝゝい世人婦女の連俳ゝゝ功ゝのい詩ゝ
ゝゝ所謂ゝおゝ世ゝゝ名人ゝ称ゝゝ
おゝ謙ゝ言ゝ今の有用ゝ用

十

ゝ例ゝ言語の虛實ゝゝ一
知ゝ　十知の二ゝ論ゝ公冶長ゝ
先後ゝ一世詩ゝゝゝゝ

○子謂子貢曰女與回也孰愈對曰賜也何敢望回回也聞一以知十賜也聞一以知二子曰弗如也吾與女弗如也

今按此章者徵子貢之方人之惡世所宣給吾聞不及尚不察夫子之虛實耶彼斯責方人之向而可知不暇之對也於然諾抑不者以與子令註許可之義止乎此與者同也共也或說仍者點吾與女弗如而所謂慰了

子貢ノ詞也了立ハ右有ハ温而勸善也則責ル
我子貢ノ時ハ者厲而懲惡也乎論語者知微
之機変而知ス其時之七十二弟子則可知其
日之孔子ノ富貴矣然ル聞而所知ル有上智者聞
而知ニ了則十モ麽可知万麽可知從本万法之一
理也則也下愚者聞一而知一了則鳥者黒漆
路ハ者白止爭知ニ時宜之変乎乎雨有則論語
之二與十ハ者將宜ニ子貢之方人之癖也智者
立ニ八段之違而含蔵ニ子貢止者必定也

儒仏内證

梅もとりにけり幸ヒて論者の辞ヲ論ス
あんたらくるの無慶とそこに釈如来の道と
阿雖ヒ孔子のうとを孟子ひろがりひ

居ル天竺も此ハ我和ハ
下垂迹ハ子の仏ハ王代より非ス仏ハ
とふ然上人の会仏ハ子を住蓮ハ手ひろ
やりて住蓮あ手にさそれんとしたもの
親鸞ハ日蓮ハ道を仏の信ハたれハ
ての弟子ハ者ひろいひろがりて隠之の道ハ木庵
ハひろがりて阿雖ハ好色の浮ん
あれん木庵ハ紙子ハ裏のハ法ありけり
富貴の人ハ王侯の家ハ入て茶の
湯のあるハ酒盛のゆめハ和ハ
いかうハハハハ一時の拍ハ誠ハ一ハの
建立ハ仏門ハ敵ハて我宗とかハ火雖

水災の変あるいは古詩も才子と作の
まぬを減ずるを抽ずる天命の次第あり
とも云へり今子頃冥府の性面也
頌漸　四教儀に頌漸秘密不定の四教と仰れ
の上は次第あり儒書に温厚の二代に
一一要と仰ぐ仰ぐ（スミ）ものとも有る限と言
薩と云（言り）て今の頌漸の元は此の元ましまさ
ずして元品の無明を破り元品の
の判者の下に至見て一一
花厳自在　仰ぐ花厳と雷厳とも云れ法華
の源ありて教誡に雷厳と云文章と花厳
とも云れと和漢論とれに意ふ所くと雷厳と

いひてあつまると花厳といひしとも
いち人もれちこの別の花厳
の辨は只今一今や和漢の諸人を測ぬ
人麿と云て儒仏に成人の雷厳と云て
仏子に花厳の元祖ちとれとやはり十論
の義ぬ云て和に杜陵と西行と云人
と元祖の差おとも云
我身功　柳子庵の遺稿に性圓と子和尚圓相
の中に二人の係あり今の二頌圓の類也
賛と是仰の筆あり　宣雅翁
稿書に此人の事あり　宣雅翁
元はあちこと　師云　傳法竹

既の用此何らにたとらて早かてん　東老坊
掃きちらに山と章ちと花のかせと云ちるちん
減て祖師のかせ性と云ちるちん
ぬる處の人と看破されへ内電の変ちたと云き
のなてこれに温厚の二和をちるて　お件を
なちちせ依の石深ちて云ちあちしよちあちし
飛諧も人の好悪てかくませたてこ四ちら
と云ちはて東老坊を師命と云れて雖法の
遺状と云て古今て誹諧のえと云砂て
天下の古訳を坐断をしたて道て建立の章
はちれも毛ちれは国を識文ちて完に祖師
の偈法をちれちれ毛

仰頂和尚　此和尚の在世を天和貞享の記あり
播磨て盤珪禅師と云て仰頂和尚と
云天下て龍虎の名を識ちれ風雅と
称のちを武蔵の深川て禅利あて
芭蕉庵もたちに立ちて

尤後楽　遺稿の五和て雖法の遺状七通あり
八雲紙二枚ち横折一枚の遺物の黄ちあり
ちを滅ねこ年ちたに尤の深く和ト
ちれちを尤ねの手とちて金言の教て
ちて祖師の叮嚀ちる其言也善ちと遺言
の旨を伝写て百世の記念て残ちもの毛

扶風へ上り永く[illegible]
[illegible]不[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

元孫七年十月日

[illegible]判

仰出候ニ付[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

元孫七年十月日

支考は[illegible]
[illegible]

[illegible]判

遺物覚

一　三日月日記　伝来之

一　発句あまた　同

一　埋本　其角方ニ有之

一　新式書入　是ハ杉風へ下されし旨書置　写ハ支考望ニ付下す　支考ありて写し

一　文章反故等　是ハ杉風方にありて其外の稿は支考へ下さるゝ　遂披見し

一　奥州紀行　去来へ可遣　去来ハ能書公羽之書きたる遣候て下さるへし　杉風へ

一　猿蓑の撰集なる　同

一　古今、序拾遺人一首、秘伝抄　是ハ支考へ下さる

元禄七年十月日

はせを判

右は湖南の本覚寺にて記し給ふ事をとゞめて膳所の曲翠亭には跡をひらくに臨終の折も流の書はやつがれ支考へ也、師翁の一派と名判とも祖翁の自筆ありしを後には家の伝とはなりぬ後の予ならずやらん是を一生の遺言として後翁終の期はちかからんを存ぜしを惜て後勝あれしとをのく洞をぬぐひしさきを越に我師の任おきつるに此遺物にあづかりし

物の始終　按するに此の始終とよらん人間の活命あり遠きと一生あり一年あり近きハ一月一日ありやして一念の間にも刹那の始終あれハ士農工商の家に生れて我ら何をすと始あって

何すと終ちるとも親しき人同士の乃至
此上なき人と我と交際を一生とれとも自己
とて自己とされとの教也とられは設しをの
の旅美を田其名双六の遊しかんてのきるの
逃諧とまるとて逃諧とまるとて逃諧と
らやむとも乃のふとしるの人ちんこれらに
ちなの用ちとつる遣水の教ひと感とし
人間遊所　梅ちるに逃諧を例の如推して古風
老人の所為をいくあやそとい論語富而
可求也雖執鞭之士吾亦為之如不可求從
吾所好とつるも論語の人と見てそ射
の指詞ふりとやく言語の表裏とおもて

れ子の吾好遊むく宮のふかに人間の
とつるしちるとを此詞を利をれちとくを
此詞を宮をれん逃諧のそ此これの諧
学ちを油ひとを学ちをを

傳四

神農黄帝　梅ちるに此一對なるも猿田彦女の
学指あるて学指のはちとつる也非歴を例の
木をを衣とをを衣外とをるを望れ
黄帝を帝に衣冠とをを一生驚をの逃諧
をを指とたくをを屬と虛實の作をを

六義　六義を詩指の論ありて此を風の雅とい
雅を朝廷の作とい頌を君主の作とを以雅頌と

義とハ賦比興と義とするハ六義の差ありて諸おなし
ハぬもとるに我家の云事とハ風ハ盧也雅
ハ容也頌ハ一万物の讃なり文の虚なり也俳諧の
体也賦ハ眼前の姿情をいふ比ハ物をもて
そこに比し興ハ心ありて物を思ひても喩の有無
にて自他と鄕の差あるとあり一説に有馬の
略文にて詩家にハ虚実の沙汰なく風雅の二字
と口傳してあるも

没滋味　撥ぬるに汁向善を食くひてすの数ありて
上よりさかのぼりて元理を持すき下よりあつて
もすりにゆるよみてさる末も傳へけり他のあるもさも意
ハ俳諧の韻とろふを以て汁や須ろよあるらめ中腕

されあるとハ茶の句に用ひる中の探の本意とハ
得るて大小のねとりそむてあるを鉢よりもあ
ようハ押くにゆとりぶふか しきるれ
投する辞とかへりて茶碗の中に世界あると
人をひやそて言説の事たちくて今の作者頭もまあ
負けとおかしくて人の勇言（ワクリコト）にありかされそうに
たれとせ味の力味とて禅家の人のあらめ滴也

笑中刀　撥ぬるに就三字ハ禅録の常談にして
学者とあつかふ柳揚なりけれど儒ハよつて對
い或ハ和中の節といひ或ハ温中の魔といふも
言中の深情を意して云ふなりて言語の
表裏とするなり

第三段

白馬之徳　接ゝる白馬の二徳とて智仁勇三者
天下之達徳也（ナリ）と孔子の詞につゞいてこれを此徳
のけ〳〵そなはりたる人と此論に再注して智
い般捷の変といひ其仁を談笑の和といひ其勇を
頑挫の言とつゞけられ仁勇とは一歩のそういなりて
論語にも此三の部あり仁者能好人能惡人と仁者
必有勇勇者有未必有仁とも其能好惡（シヲ）とい
その能惡（シヲ）といひ勇あれいかなるを仁勇とかい
これ〳〵勇者とて仁とかはさんと論ぜられ其後の部
にそれとちがくそを智あるこゝにはあるこれ更にそ路

武勇とつゞけ〳〵ぬ仁勇と好学の二子と説のごとく
文道と智の二子とあるこれ論語の次の表徳の
王道と論ずるとして唐虞の文章とそなへて表徳
周の優劣と宣のごとく周の至徳とあるこゝ文王の
ちゝにたゝへ武王の武といふこゝ武王有乱臣
十人とも才雄ともいひもとゝ表徳の表徳
乱臣のつゝとあつゝと文後おのゝ例のごとく
乱臣とそ〳〵乱世の英雄にてとれと文道とゝ対
いたるまの奸賊と此子意ありたるに白馬の或問
ゝゝ般捷の結ゝ猿の朝にとひおて仁勇の二雄陳
あゝ雄云仁論ゝ渡矣の和とりて仁の一徳ゝ紙
何ゝ頑挫の言とゝのゝや陳云論語ゝ

賛とへりしやうに君子有りこの要望之儀弦即之
也温聽其言也厲然而師直の言化
て勸懲の二れの法れあれ法れのおこれて
おこる一ちを教化の詞の表重なんとせ
詩歌連句　白馬文章訓ゝ法ゝ連俳のいと
あげて位階の論あり風雅を詩ゝ歌ゝ
やゝきて連俳を校業とせく法ゝ
とゝ連俳とゝ
の文ゝて俳諧を武ちれもゝ天地の源
ゝ和ゝ武ゝ文ゝ武ゝ文ゝ武ゝ
いゝ武ゝ文ゝ
ゝ俳諧を詠連と系ゝ

天下の治見なんゝ法ゝ連歌の歴史
なゝて武威ゝ文事とゝ
とおこるゝ俳諧を詩歌とあらむゝ
ゝて誠ゝ論の
連俳を妄の
とゝ倭ゝ武綱公平ゝ對ゝ
強弱の二用ゝ文武の
も不謀の位と
家子ゝ詩ゝ
一世の
人ゝ儒
言語変　を後

て時宜の自在と案ずべし誠に言説の大ゆたかなる
ことは北野回しもやはらかにて小人の言同年君子
の意不豆繁と云ひつゝも言説いとまもなくして
むらひてこれこそ人の意とかうらいちうらん

道文章　白馬文章訓に文まの用ゐて文まの用ゐて
人に衣冠のかゝりあれどもるる数に羽もものあやかりて
雅俗しるる昇もまるべきに世の頼に
はれて海中とあらひありくうこゝく道に文と
して人にたゝへ文をたゝへてせこれをうるそれ
とれまも子貢に問て言ひて足志文以足言
不言誰知其志言之無文行之不遠かたし
かうらい道とゆむもるに文のそうるとうるへ

にて道の文章にれまた幾言とゝ
耶新にくくたくに比喜と如くに荘まて富言と
而はうらうて拙の形言に過當の用ゐるに新巡
の七よ本末をて幾言しあり富言しあり作詩
もあれに雅言もあれ一字一言に文まとゝ
らまて一切和と詩に新元
あく創に淵の字まもふれに戻もうるに読
まうらいて和玉の篇とうるなるまうると秘密
の一代まて阿提羅雑婆提羅叶し唱あれ尼病
とまうらに化拙とまうるあるもぬるを全とし
ねまて一唱に叶に号の功徳あるまうに七まうまう
のるに比あるまうるとやこれまて仰ぶの軍北

て二道とをいふ事あり二ツにいふこと
の文とゝ今の二用とをるなへたる書籍
万巻あるゝもよろこゝろまりの通ゝもしき
子孫あり ちうにいたの字を達て兼備とす
畫十五畫の字とあつゝて人のよろこゝ備
とおりる文章とゝたゝも何の用ちるやゝ
俗諺の手話ちる文章ゝ文の用と違ゝ
一ゝと此訓ゝ一ゝこゝたの通称ちん

滑稽證人 接ゝに儒書ゝ作話ゝ記ゝる人あれ
論ゝる人あれゝも秋邸ゝ何ゝ如ゝかく言ゝ
何ゝ如ゝかくゝと向ゝゝ言ゝ
かゝもうゝて人の用とゝゝゝ或ゝ

かゝる古説ゝ俗ゝ陽ゝと陰ゝ或ゝ何偏の何冠の
と文字常聲ゝ或ゝ
味ゝ
と沒ゝ 知腑の法花と論ゝ文章ゝ
石屋ゝ
ゝ財のおゝ
架坂ゝ小屋ゝ例ゝ檀林の
優旃ゝ風花のゝ
のゝ
中ゝ庭中のゝ
ゝ薩室の諫ゝ
坊主の

によていよく君をはなせし国家のなげきを
かなしみ一しはらして諫突の和説をもつてへの
ほうせんをむかなもへして方朔か不死の弁は
武帝いさくいろなれて東方朔によるも拙の
事なんはなれし今は不滑稽の人そ智仁勇の
ことおそるへても死て隨めもしかれておもんはかる
も言はく王子比干はやくにそれは伯夷叔斉
はらはれうんみことを君に一あはれしおほり
やし畏非は膠をぬらして場なり於ては實に於て
實をなこともへは不道の君の耳にさらはれて竈
に於て實をなこともへは不道の君においても
實の虚はなりして竈の祈のあしわきは人のはなれ

張

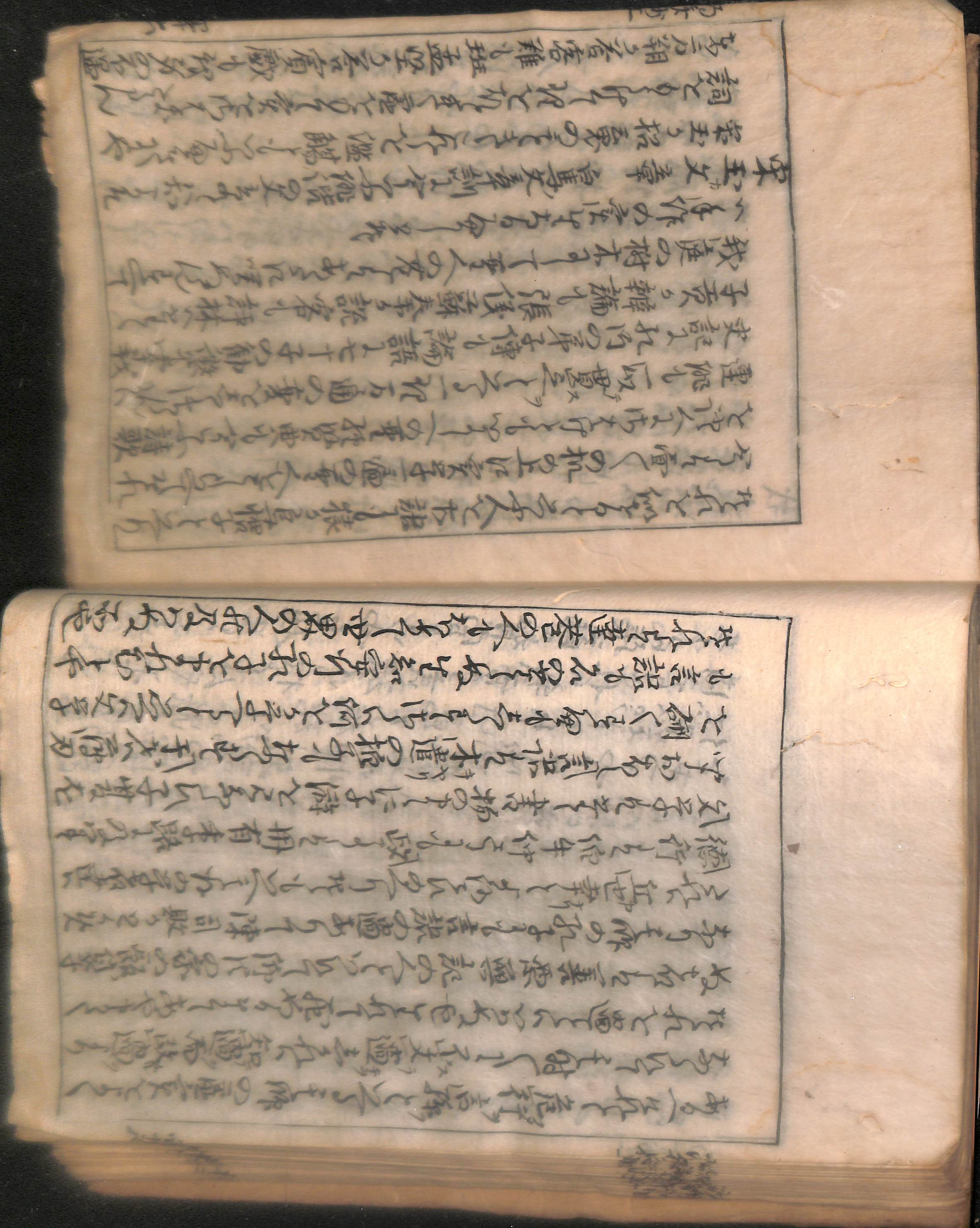
あるは儒術は速疏に注するかれはとと注は
今れおもとと論して言語はもとの知りなれは
儀蘇秦 向馬教識訓に一円数指の大賤とは
て論語に十指の詳論あれとも儒門の
人くれ宰我子貢とともにたもなる張儀蘇秦か
族をも辨は口の説客としてはけて今の世に
のそく不實をいかしぬれともは言辞を文字
はれ内の口称してせはの為用となとなりて
わして夫子も隠きてのなく徴をえ對しても
儒の二字をとりて仲すと称して給の二字を
はなきの告をして言語の用ちる也儒門は
いつれの詩書も礼楽も

きるとしてさとやちてを用の仲文ちとく史記の列傳に
齊田常欲伐魯孔子曰魯父母之國二子何
爲憂出子路子張子石請行孔子許之中略故子貢出存魯亂齊
破吳彊晉而霸越十年之中五國各有變
ときれいけもの軍とそなはれてゆきたりて弟子からら
れし父母の墓所とあとられむより言葉とはの
つをなとわらはたかのちちんとおとさちとに治て
こんもくちちとされと天運の事あれはかちなる
はいを作しかふりて孝將遂海とあり志るに
も功とをけてはやうて子貢といはそれ乱齊
存魯吾之始願強晉擊吳使越霸者賜之

詭義言傷信慎言哉ちとを修行に敬誠とれ
ちて行とはなんよりはなはあり世なれすの家
訓と屈節の二子ありて所演おれの秘訣と
ふをとらたらく国家の治乱とあるに乱雷疾風
の事とおれく事人とをたくちとれ
とをなちとちのかく天道のあくかり
れてをて仁義のいとかくて使りとく天下とあるむ
とちいと文学とちいと国とやちとちいと政ちちと家と
ちとふちとちいと言語とあつちとちとく子言語
いと文学にちて治ちと連俗のいのをもも俗語の言語の
意用とちて一しちとれいを行て治道の次第して
をて使りの治あれとも之皇の代とちとく

虞舜をすてに孫子のはじめうつて病陽はい
と稱め用のことやまの世の法道をふい政ゆう
文学を遠ざけて言法をうの為用ちうとや
きうりと孟子めるとをもれて戦国の中にたぎと
こふをうして時代不遇の用利ちうにつて世ふ
政ゆうも文学をもけいう言説をちうくはをもれに行い
とのく天の使令をうきうていつれも智に勇とかねをうを
あうはちて三男の教をくをうり法道をすぎの説
とはをして千戈をもて法見のやうをうとをうるはあり
今や法道の五行をほとんど使りい文学をほうう
文学を政をうをうに法をほうう政をうい言説をほうう
千戈のくをと言をもいうい言説のくをと利をとを

きうくに張儀の蘇の智謀をうをうて孫吳をうを千戈をう
法をうをうれに我を言説をうをうをうをうをうをうをうを
仁不知をうをうをうをうをうをうを論説をうを路をうを男
とあつをうをうて必世源をうを而懼好謀而成をうを
文をうに風雅の表情をうをいい邸をく言説の智謀をう
きうをうとをうをの傳をうをうをうをうをうを
とをうを宰我與子貢之文跡有大史公所記皆
非世をうをうをうを我好の法極をうを尾の史記をう
今をうをうをうをうをうをうをうをうをうをうを
子貢をうをうをうをうを宰我の子貢のをうを章に
不振の持論をうをうをうをうをうをうをうをうを
耳のをうをうをうをうをうを眼の人をうをうをうをうをうを



とこれをうけて古今の優劣を論ずる事
の訓誡なりて虚実二子の宮と共に文章の法結を
七段の詳しくなるべし

文章感仰　按ずるに感仰とは文章の金玉の哀怨より
出でたる艶書のごとく束ねるものなり思ふものなりて
ものごとに百数かぞへるとも人の心を動かすべき
ものなれば第一家を立てるものなり人と人とを同のあやなり
ちらやに云に用の用とするなり山嵐
第九段の可怨は二子の詩をあはせて小町の歌の
哀怨と田村丸鬼神の感仰を辨ず

我家家法　白馬教誡の二句の要論あり

我とは我とは人と人とを儒仏道の法
にて我とは我とは人と人とを儒仏道の法
のごとくにて我とは我とは人と人とを俳諧
あるべきなり

温和　むかしよりのおもむきにて温和
なる儒仏道の法にて温和
の道あれども物ごとに温和
なるべきなり

端的　恋とは端的の恋とは
端的の端的の恋とは
端的の端的の恋とは

親疎　親疎の調とは
親疎の調とは

表裏　表裏とは儒仏道の表裏
あつらへとは儒仏道の表裏
人の所作とは所作の所作
所作とは所作の所作

ゝこれにちゝて伊尹ゝ任ちるゝ仙て言ゝ諫ゝ
諫諫の義ゝあゝちて言の義ゝおゝいゝたに
たゝむゝねゝと諷諫ゝて危行言孫のゝいもゝ意に
ちゝゝふゝと諫諫ゝて巧言令色のいもゝはれゝ
親家の恩はゝいゝい達ゝて仰孫とれゝ親
二祖ゝ撐仰とゆゝりのゝて孫とゝて心ゝ
あゝとゝれゝれゝて世の恩陪ゝて世百い
世代の公道あゝん仙諸ゝいゝけ訴ゝいゝゝて
百世の人ゝとゝく迷ゝ百世の人ゝと忍ゝ恨
ゝも速指ゝて人のゝとゝ歌ゝて我ゝと嗤ゝちるゝ
ゝれゝちゝて人ゝ説ゝゝゝて誠ゝ仙諸の一たゝす
ゝ諸諫ゝ諷諫のゝちゝあれゝゝて恩の一ゝゝゝ義

おゝとゝちゝるゝゝゝいゝゝゝ
地柳ゝて君子之行已期於必達故已可仙
屈則屈可仙伸則伸故屈節者所仙有待
求伸者所仙及時是仙雖受屈而不毀其節
志達而不犯於義ゝ
可伸則伸ゝて我ゝとゝるゝゝゝ所仙乃時ゝ
可屈則屈ゝゝ我ゝとゝるゝゝゝ所仙有待
ゝちゝゝゝのゝゝかゝゝゝ言詔ゝゝゝの意
ゝちゝゝゝて導意ゝゝ諷諫のゝちゝゝる
意にちゝゝゝれゝの要ゝゝゝゝゝゝ
ゝちゝゝれゝ百世のゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ疑ゝれゝゝゝ世の戦国ゝゝ陳のゝゝ

さてさて應聘七十國而歸厚於公卿之間
其不遇也如此やはらいもびの詩列子雄
五霸の君とたしなめあらそて太誠もちのれよ
憂ひの色をうしなて必そなん可伸も可屈も
せはの機ちるとやうての仲按ろく論語に時
の多能なるを双六ものいもうちわ算もさしこの線も
尺八も上手あんたれと子貢いんがるいて愚部
求達い賢人の權変あれいて越王勾踐と進使
孫とてそせよそんてあるて也はるい論諫
と訊諫とのの一歩ろ里の大ものあんもびろ子西ら
楚王あらいて賞忠誅諛の和訳より前臺
の遊のやうをとれ孔子と対ちあらいて百世と

訊諫の鍔なるあるとりあるれて尚ものるて
秘して也ものと秘ものて一まるもそしけ百の家訓
ちんとそしけるらいす殷の伊と春秋摂伽の所
酒落　むーるる儒書仲按の学ものと殷の孫
あり四智を般捷の学者ーとるれて始あれも
終あり莊子にいろる太早討の人あり愚痴を
財勝の石人とものあれて酒色とこのもて衣食
とえるて仰書いるる性の人あるもに
今ものの酒落とを大恨の人ものと仰ものを般捷も
まあれ財勝もとるれて財勝ものと人の信ものを
とものるものの酒落と害ものるるるるけるるむ
ーー世物の序も論語ものを二程の時ーいるる

剛毅木訥の仁に近しとおもふ人こそ虛實の
あつかひもあらん　稽古の程ふかく修行すべし
朱氏も般捷よりはまされりとかつてのたまへり

五倫道　按るに儒佛の法義違ひはあれども
幸とはなしもとなれども佛法にてもとかれたる
所なるべしとおもふ　いつれの教にても人倫
又倫の名數とさまざまなる來歷ありと雖
なを何ものとかいふべきや倫のことはね
ねんごろ自己のんとかくあり　倫の字
と解するにはいかなる大切の和とのべんにたれるか
ゆゑ而もつれ共倫に寄て服せしめて天と恨れも
所のものにもあらず中庸にいはく道とは我の時を天と

わかるる色なれども天理と私なく富貴とも貧賤
貧賤とも富貴なる時も貧賤に
なる色なれども五倫のきはまりなる喜怒哀樂
あれども時にあたりて中節
怒るべきあり哀べきあり樂べきあり
喜べきあり怒べきあり哀べきあり樂べきあり
次に所人の道にあたりて知と行と
とんの處實ともなく所為とのそ
ちとあり仁義禮智の有無
其人喜怒　按るに世俗の事にてもまれ
なる接物の所為あるべきの事なり
或は面のおもてにあらはれ

時あり或は世に出ずして終に知られざる人あり或は酒色に耽り
中錯と云ふ物あり或は武勇を以て世に聞えたる人あり
るこれを例のあれども古詞に耳とゞ
ゆむこゝろ用を為て世人を欺くもの多し
て世を欺くこと甚だ可笑
仏諸の席に入る軍中の交間を
世代の事にして人を欺くこと

傳四

仏諸内證 仏法と云ふ法を
いふ法は儒仏とも法を
禅仏と仏法を人の信心をくゝる地也

佛法にて寒山拾得の竈のおに知識とかくして
国字のそる敬とあるとむきもらこゝきれと仏法
此風あり八つ仏の一字を内法の信とおぼえ
一ちれと仏法師あるふ人を豊干の虎
やあるこゝ雅なれ祈もるへ
ちむる時を油ひとすきも

信徳二字 拾ちに信の字ふ石馬を祝
の書記 信を祈ちに風
人ちあるあるこゝ虎の差おい例の微中
ちに仏法の新文ちに法
上を敬ふ下を
ちに儒仏

とあるされば儒門のれ仮と王帝の稽同も仏家
の説屬に有力の檀那も詞の表まとはとる
ばんやそを仏法ならん時い柿の樹より美心種
とかるそれ六十六国の美地より拾るも一匿銀
一粒ばかりの信心なるとも佛まも
心施財施あれば拾も言送財送ありて
表むきの優なるを信言とのて信財と信財
とかるこう信言とのて信財とかるこいれと
善ばかりの貧ばかりいむまりと儒門ら
地獄にて貧ばかりの財とのてれとまるこる
れるに世代のよりと感を一生の神人を家業の
致思に手孫の栗とらるるい敬叔う事を

有りて微夫二子之既財則丘之道治將廢
ちもこれまるを無隠手爾こるる事人の実話
ちらに漢手のるを人ばとかるいる名利
といるんも意の名利を我まるあむ美雲
誠をまるものもまれ今の信とばまる走を
のる死翼ばい財用をまれるとるる
徳 白馬教誡訓 陰陽報 教の法ねる
例のる面ゆまるの一るれをを世るるる
をるいる人まるもるいるるる金の夫
るとまるいむまるを人のまるる一言のれとるる
を金い塀に於るるも同おあり一生まるる
意生まるるるるるるるるるるるるるるる

[illegible]

[illegible]人の道とかくれば却ゆる人[illegible]

[illegible]

[illegible]の罪あり[illegible]れよの担雖とそこ[illegible]天生德於予

[illegible]おの[illegible]の言[illegible]あり[illegible]今れの[illegible]に

[illegible]とかいて[illegible]功とそこ[illegible]也れと[illegible]

[illegible]拙の間[illegible]ちる[illegible]り不顯惟德[illegible]仰[illegible]

[illegible]拙と形容して[illegible]未だの[illegible]家と[illegible]人と天上の

五裏[illegible]人の[illegible]あり[illegible]徒と[illegible]

[illegible]なく[illegible]ねの用[illegible]て[illegible]向北

方[illegible]

例[illegible]一歩の[illegible]れなりて我のまるとか人

[illegible]人のねる[illegible]と[illegible]不伐善不[illegible]

[illegible]儒門[illegible]顏回[illegible]徒[illegible]ると禪家の道[illegible]

[illegible]武帝[illegible]一寺建立の我のとこ

[illegible]功德の[illegible]